Ⅳ－47

都市景観基本計画に関する比較研究

岩手大学　正会員　安藤　昭
岩手大学　正会員　赤谷　隆一
岩手大学　学生員　○佐々木貴弘

１．はじめに

今日、都市景観という言葉は日常的なものとなり人々の景観に対する関心も高まってきた。同時にそれは景観行政への期待の増大へとつながり、近年全国各都市で多くの景観対策が施されるに至る。本研究は、その指針となる都市景観基本計画を全国主要都市の計画書をもとに比較研究するものである。（表－１参照）

２．都市景観統合理論からみた各都市の景観計画

都市景観を人間の精神的側面と都市の物的環境の側面との相互作用と考えたとき、それは固定した視点と対象によって成立する透視形態と、その総和を契機にして形成される都市のイメージという、より包括的な２つの景観現象に大別することが出来る。前者は都市景観のミクロスケールである対象視点の景観表現を扱うのに対し、後者はマクロスケールである都市の骨格構造を取り扱う。この都市景観のカテゴリーに人間の脳機能の左右差を科学的基礎とした「半球モデル」を交差させることによって表－２が導きだされる（都市景観統合理論：安藤　昭　1990）。以下、各都市の都市景観計画をこの原理に基づき分析する。

表－１　調査都市と景観条例施行状況

人口（人）（平成4年3月31日現在）	－10万	10万－30万	30万－50万	50万－100万	100万－	合計
調査都市	水見 日田 嬬川 丸亀 津山 米沢	*小樽　帯広 鎌倉　松本 福井　*明石 盛岡　*宮崎 弘前　*秋田	*那覇　高知 高松　*豊橋 長野　*奈良 旭川　岐阜 *倉敷　*金沢 *長崎　*姫路 *静岡　*新潟	鹿児島 *浜松 岡山 熊本 *堺 千葉 仙台	広島 *福岡 *神戸 *名古屋 *北九州	
計	6	10	14	7	5	42
*景観条例施行都市	0	4	9	2	4	19
景観条例検討都市	4	5	5	3	0	17

表－２　都市景観統合理論

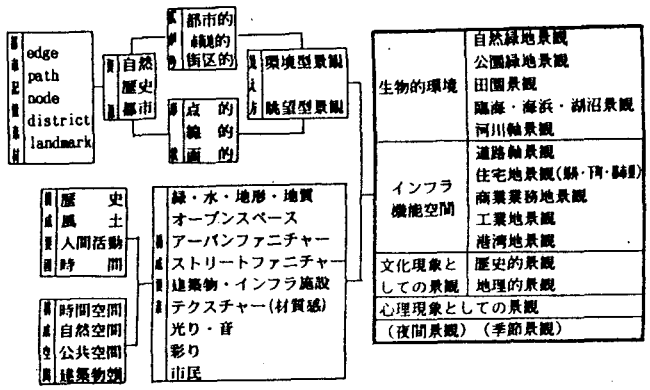
半球モデル／カテゴリー	左脳（ロゴス的）	右脳（パトス的）
骨格構造（マクロ景観）	Ⅱ目標：脈絡 課題：都市コンテクストの編集（総合）	Ⅰ目標：わかりやすさ 課題：都市記憶素材の採集　（分析）
景観表現（ミクロ景観）	Ⅲ目標：個性 課題：場所の個性表現（分析）	Ⅳ目標：修景 課題：美しさと生活感の演出　（総合）

●都市記憶素材の採集　　都市記憶素材（edge, path, node, district, landmark）の採集は、都市の骨格を把握するとともに景観対象となるべき要素、すなわち景観資源の抽出にもつながる重要なものである。その作業において津山市では、現地踏査による景観現状調査と、町内会、各種団体を通じた景観資源アンケート、そして景観資源の公開募集を実施しており、市内全域におよぶ詳細な分析調査を行なっている。岐阜市や長崎市においては観光と結びついた都市を指向しており、来街者に対するイメージ向上も課題として掲げ、岐阜市では観光資源や観光コース・ハイキングコース・観光行事等の抽出による調査から、長崎市では歌謡に現れた詩句や直接来街者に対する調査から、客観的都市像を検討している。また豊橋市においては、市内の小中学校の校歌の中で唱われている山・川・海などの自然情景に対して調査を行なっており、心象風景の調査法の一つとして面白い。他方、弘前市や福井市においては、伝説や民話、歌碑、記念碑、町名の変遷といった民族資料により、歴史的な都市像の発掘にも努めている。都市記憶素材採集作業はメンタルマップ法などによる市民に対する直接的な調査が望ましいが、その補助的作業として歴史的・民族的資料や観光的資料などによる調査との併用も考えられる。しかし、各都市におけるその採集作業は至って曖昧なものであり、その手法が不明な都市が多かった。景観資源が計画の根底をなすものである以上、その採集方法と内容は計画書に明記すべきものである。

●都市コンテクストの編集　　都市記憶素材は相互に関連し補完し合うことによって複合体として都市の文脈（コンテクスト）を形成している。この認識があって初めて個々の景観表現計画へと移れるものであり、そのためにも描きだす都市構造は、都市コンテクストとして包括的に編集されなければならない。採集された都市記憶素材を解釈・編集し、意味を与えることによって、①景観の類型化、②都市骨格構造の編集作業がなされ、全体の略画的都市像が描きだされる。そして、さらに③象徴的言葉を与えることによって都市景観のテーマが設定され、計画の方向性ができあがるのである。①は概ね図－１のように表され、②は表－３のように表される。②の骨格構造編集方法においては、帯広市において造型形式であるグリッドパターン構

造がみられた他は、ほとんどの都市において山水景形式が取り入れられていた。これは日本の都市の多くがその形成過程において、地理的・地形的条件の影響を受けていたことの表れといえよう。

次に③の作業についてであるが、その代表的な例として仙台市と小樽市が挙げられる。小樽市では、湾曲した港湾地区や街並、その背後の山々と傾斜地に広がる住宅地といった地形から古代ギリシャやローマの野外円形劇場の姿と重ねあわせ「劇場都市」を都市イメージとして掲げており、また仙台市では、市民共通に挙げられる「杜の都」の都市イメージの継承と育成を計画の柱としている。このように空間に言葉を与える創造的行為は客観的視点からの議論を可能なものとし、あるいは法制化の実現へとつながるものとして、重要な役割を持つものである。



図－1　景観の類型化

表－3　骨格構造編集方法

骨格構造編集方法	技法	代表例
造型形式	パターン方式(グリットパターン等)	サンフランシスコ
	フランス幾何学式	ヴェルサイユ宮庭園
自由形式	イギリス風景式	キューガーデン
山水景形式	イメージモデル	盛　岡

●場所の個性表現　　この作業は、全体との調和を考慮しながら場所の個性を表現するものである。例えば姫路市や熊本市などにみられる城郭の眺望を生かした手法は、その土地の歴史性の表現であり、歴史的個性を生かす手法である。さらに岐阜市のように城郭からの眺望を都市全体を一望できる特性点として挙げている例もあり、個性表現手法のひとつといえる。同様に盛岡市では、都市の地理的シンボルとして岩手山の眺望確保に注意が払われており、これは個性を表す代表的景観に注目した手法である。以上の手法に加え、金沢市や鎌倉市などでは、歴史と現代、聖と俗など変化と対比を演出する技法を取り入れており、歴史的経緯の深い都市などに多く見られる手法の一つといえよう。また堺市では、散在している大学を結びつけることによって学術・文化イメージの形成にもあたっているが、これは特定の素材を基調に景観を整えていく手法として綴りあわせ法と呼ばれるものである。全体的に各都市とも個性の追求や自然との調和をテーマとしたた表現手法が多く、その手段として歴史的建造物や自然地形が数多く活用されていた。

●美しさと生活感の演出　　都市景観計画で行なわれる最後の作業は要所の景観表現の修景であり、それは図－1における「構成要素」の洗練であり「構成要因」との調和である。視覚的景観の追求のみならず、触角的景観（テクスチャー）や聴覚的景観（サウンドスケープ）を表現し、生活感とやすらぎを演出することによって人間感性への働きかけが行なわれる。その際、作業が主観に偏らないように市民に対する景観意識調査を行なっている都市も多く（広島、新潟、静岡など）、特に広島市においては「都市美診断調査」として要所の景観をＳＤ法などにより評価してもらうことによって、景観「構成要素」に対する解析を行なっており、以後の計画の十分な指標としている。また旭川市では、積雪時の景観に「雪景観」として配慮を払っており、奈良市、堺市、丸亀市、高松市等においては、ライトアップなどによる「夜間景観」にも着目している。春-夏-秋-冬、朝-昼-夜といった視点より各者の景観の差異を比較し、いかに結びつけるか、あるいは対比させるかが年間を通しての計画のポイントとなる。

3．おわりに

今回調査した景観計画を策定している42都市において、景観条例を施行していた都市は19都市であり、また将来において景観条例の施行を検討していた都市は17都市であった（表－1）。両者を合わせると、実に８割以上にあたる36都市において条例による景観形成推進方策を掲げていることになる。本来都市景観とはその土地の生活感情の表れであり文化の象徴であるので、条例による景観形成は好ましいものではないが、多くの都市において条例の施行や検討がなされ、中でも中小都市において将来における条例施行の検討が多く見られたのは、情緒的思考による景観形成推進の限界を表したものと考えられる。